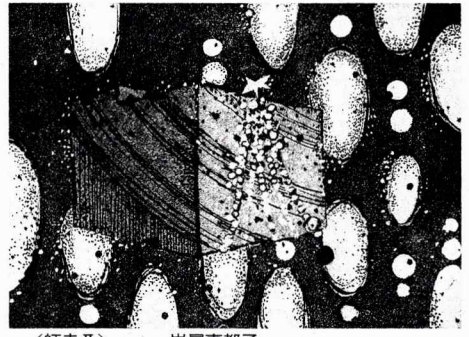


朝日 歌壇



〈師走II〉 岩尾恵都子

小林貴子選

- 名は皇帝されど孤愁の冬タリア (水戸市) 町川 悠水
- セーターの飲み如何に遺影妻 (東大和市) 板坂 壽一
- どこどなく慈悲に満ちたる鯨の目 (鹿沼市) 鹿沼 湖
- 閑の中をわざわざ来なくとも (東京都杉並区) 伊東 澄子
- 息白し紙むきがたきシガーチョコ (別府市) 樋園 和仁
- 欠けてゆく記憶のかたち・フランス (広島市) 金田 美羽
- 鶴啼げりおのが願ひの叶ふまで (奈良市) 田村 英一
- これがかの三四郎池激石風 (船橋市) 武井 成一
- 開戦日人を殺めるころ問ふ (東京都荒川区) 和久山伸之
- 軍鶏小屋の裏に表に狐鼠 (津市) 中山 道治

【評】一句目、この時期に咲く皇帝タリア、その心は孤独か。二句目、セーターに穴を見つけ、「これどう繕うの?」と遺影に問い掛ける。三句目、微笑のような悟りのようなあの目。四句目はせきしろ・又吉直樹の「自由律俳句」に通う味も。

長谷川耀選

- 金箔に包み込まれる日向ぼ (甲府市) 村田 一広
- 蟬の光しづかに枯れにけり (静岡市) 松村 史基
- 十二月この大なる谷の底 (長崎市) 下道 信雄
- 二十億光年の詩人西せり冬銀河 (さいたま市) 成田 英明
- 笠智衆生家の寺やみかん山 (熊本市) 有働 利信
- ☆あの子って私のことか箱の道 (成田市) かとうゆみ
- ラグビーの勝利のボール蹴り出せり (久喜市) 利根川輝紀
- しづめるやこのまま行くと再雇用 (朝倉市) 深町 明
- 鯛焼の退屈さうな顔なら (さいたま市) 與語幸之助
- 寒風にオープンカーの心意気 (高槻市) 若林真一郎

【評】一席。金箔のような太陽の光。日向ぼこという至福。二席。一匹のカマキリの静かさよ。この騒々しい世の中で。三席。一年がジェットコースターならば、十二月は谷底。やがて一月。十句目。風流とは瘦せ我慢のこととか。伊達もまた?

大串 章選

- 老境は光る枯野を行く如し (高松市) 信里由美子
- 水鳥や湖畔の屋根の風見鶏 (深谷市) 足立 弘
- とりあへず忘れることに日向ぼ (広島市) 谷脇 篤
- 綿虫や疎開地の山遠く見ゆ (柏市) 藤嶋 務
- 父語りき十二月八日を淡々と (大阪市) 清 富佐子
- 冬されて尽きる季節やこの国に (姫路市) 松田 正義
- 多作多捨捨つる句ばかり冬うらら (大和市) 岩下 正文
- 焚火囲むタイ語ラオス語ミャンマー語 (浜松市) 久野 茂樹
- 散歩する老後の日々や木の実落つ (新潟市) 岩田 桂
- 閑の吊橋ひとりひとり行く (甲府市) 辻 基倫子

【評】第1句。「光る枯野」が言い得て妙。老人の境地は斯くありたい。第2句。「水鳥」と「風見鶏」がひびき合い、おだやかな湖畔の情景を彷彿とさせる。第3句。「とりあへず」が一句のポイント。こうした体験は多くの人にあるだろう。

高山れおな選

- 銀髪の拝礼深き針供養 (神戸市) 高橋 寛
- 境内にいのしし出ます開戦日 (京田辺市) 加藤 草児
- ☆あの子って私のことか箱の道 (成田市) かとうゆみ
- 廃校に狸住めりと噂立つ (いわき市) 岡田 木花
- 手長神祀りて諏訪の寒造り (諏訪市) 矢崎 義人
- ここらまでひらがなとなるふゆびより (石川県能登町) 瀧上 裕幸
- 牛市の競りにどよめき秋まつり (松阪市) 石井 治
- 焼芋の冷えてだんだん甘くなる (甲府市) 藤巻 嘉秀
- 押上の雲つく塔も神無月 (西東京市) 今井 名津
- 看護師のニコリとチクリ小春風 (東京都世田谷区) 田中 和行

【評】高橋さん。品の良い老婦人の佇まい。「拝礼深き」に感銘が滲む。加藤さん。野趣というか精気というか、開戦日の配合で俄然生きた。かとうさん。初入選は丸4年近く前、〈こくどうにぞうきんみたいなたぬきかな〉だった。面目一新。

短歌時評 歴史を書き留める手

小島 なお

「なにを書くか」ということと同じくらい重要な意味を持つのは「だれが書くか」ということ。そこに歴史や史観が書かれている場合はとくに。

『はじめての近現代短歌史』(草思社)が刊行された。著者は平成九年生まれの高良真実。作歌、評論両輪の気鋭の作者である。短歌史を学ぶには、篠弘『現代短歌史』、三枝昂之『昭和短歌の精神史』などの良著がすでに存在する。しかし平成以降、バブルが崩壊し、イン

ターネットが普及し、東日本大震災が発生した。歌壇の場のみならず、作者意識も変容し続けている。本書では、昭和以降の歌壇史のパートを「ポストニューエープと口語の深化」や「東日本大震災後の議論」など文体や時事のトピックを挙げながら、多面的に分析しつづける。本書の最大の価値は昭和二十年後半以降に端を発した女歌論を軸に「俵万智以降の女歌論」「テン年代後半以降のフェミニズム」と、女性歌人と作品をきめ細かに取り上げている点にある。

設定をいじって元に戻せないお母さん元に戻してあげる 乾 遥香

ゲーム上の「設定」は社会的ジェンターの役割ヘトリスされる。「元」がどこにあるかを考える運動がすなわちフェミニズムだろう。歴史は多く歌壇の中心にいた男性によって書かれ、作られてきた。女性歌人の手によってここに新しい短歌史が書かれた。一方で、短歌を愛することは歴史に刻まれた秀歌を愛することもである。これまでの短歌史への批判と敬意に揺れる筆致は、多くの歌人の思いに重なるはずだ。(歌人)

中川佐和子著「尾崎左永子論 冷えた鮮烈な朱色」 佐藤佐太郎を師として始まった尾崎の歌歴や魅力をインタビューや秀歌鑑賞を交えて伝える一冊。(角川書店・3080円)

第1回定家賞 短歌研究社主催。桐原英さんの第3歌集「薄明露」(短歌研究社)に。次席は榊原紘さんの「koro」(書肆侃侃房)。第4回で終了した塚本邦雄賞に代わる新賞。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のほかはき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから。

